

フジサンケイ広報フォーラム

2024年9月・月例会メモ(2024/9/25)



フジサンケイ広報フォーラム9月・月例会は、産経新聞上席論説委員兼特別記者の乾正人氏を講師にお招きし、月例会2日後の9月27日投開票を迎える自民党総裁選の最終予想と今後の政局について解説いただきました。(講演で述べた政治家の肩書は、当日時点)

2日後に投開票を迎える今回の自民党総裁選は、過去の総裁選とはまったく違う。最近の大相撲と同じでガチンコの勝負をしている。昭和の時代の総裁選は、派閥のリーダーしか出なかった。いわば派閥の領袖による”大将戦”だった。その事前の活動には、現在の換算で100億円近い金が飛び交ったなどといわれている。リーダーには政治力の他、集金力も求められていたわけだ。その資金力によって、告示前から誰になるのかは決まっていたケースが多かった。

自民党実力者である三角大福中(三木武夫、田中角栄、大平正芳、福田赳夫、中曽根康弘)が争った時代は、まさに集金力の多寡も総理・総裁の座を射止める重要な指標だったと言ってよい。昭和から平成に元号が変わるとともに総裁選も、大将戦から団体戦に変わった。派閥の領袖ではなく、派閥の中から候補を出す形となったのだ。

そして、令和の御代となって、派閥のグリップ力が弱まり、岸田政権からは個人戦へと移った。これは、事実上派閥が崩壊したと言ってもよい。2日後(9月27日)に投開票となる自民党総裁選に9人もの候補が立候補したのが、その証左だ。その中で、上川陽子外務大臣が立候補したことは驚きだ。正直、人望はなかったが「女性総理も良いかもしれない」と述べた麻生太郎自民党副総裁の言葉を真に受けての出馬だった。

今回の総裁選は、石破、高市、小泉の3人の争いになることは間違いない。いずれにせよ、1回目の投票で過半数を押さえられるものはおらず、上位2人による決選投票になることは間違いない。読売新聞は石破・高市、朝日新聞は石破・小泉の決戦と読んでいる。決選投票に小泉が残れば、小泉が総理・総裁の座を射止めることになろう。私は石破・高市の決選投票になると考えている。

石破・高市どちらがなるのかが悩ましいところだ。両候補とも付き合いが悪く、どちらも同僚議員から嫌われているからだ。ただ、これまでの私の分析からすると、石破茂氏が自民党総裁・第102代内閣総理大臣になることは、まず間違いないであろう。



乾正人氏の近著「政治家は悪人くらいでちょうどいい！」(ワニブックス刊)では、国民にとって最良の悪党政治家のあるべき姿を論じている。